



受賞発表が掲載された HP と菊野啓さん

徳島文学協会の理事を務める菊野啓さんが、小説「邪眼」で幻冬舎純文学小説コンテスト大賞を受賞した。作品は、暴力的な父と養豚業を営む青年が、裕福な母娘二人を誘拐・監禁し、その後に展開していく異様な出来事を描く。受賞作は幻冬舎から電子書籍化される。

作品についての詳細（幻冬舎ホームページ）
<https://www.gentosha-book.com/contest18/pureliterature/>

菊野啓さん 小説「邪眼」 幻冬舎純文学小説コンテスト大賞

電子書籍

菊野啓

携帯電話も持たない原始人の私が、電子書籍出版だつて、人間六十年近くも生きておれば、面白おかしいこともあるもんだ。お金まで払っていたいどんな人が、どこでどんなふう読んでくれるのだろう、そんなことを考えているとついニヤけてしまう。大賞に選んで下さった幻冬舎ルネッサンス新社の方々、本当にありがとう御座います。ささやかな夢をひとつ叶えることが出来ました。それと日頃から懇切丁寧な御指導を戴いている、徳島文学協会の佐々木義登先生はじめ合評会メンバーの皆さん、いつも拙作をボロクソに御批評下さり、心よりお礼申し上げます。落ち込んでしばらくはパソコンの前に座る気にならないこともありましたが、おかげさまで何度も書き直す習慣ができました。今回の受賞作もその結果として生まれた作品で

す。私のようにセンスも文才もない者は、脳の筋肉で書くしかありません。筋肉は使わなければすぐに衰えてしまいます。無理にでも書き続けながら、持久戦に持ち込むより外に道はないのです。いつかすごいのが書けると信じて、これからもへたくそな小説をいっぱい書いてゆきます。そう長くはない人生で、寝食を忘れて打ち込めることを見つければ幸せです。身体を鍛えて健康に留意しながら、せめてあと三十年はやりたいと思つています。ですので皆様、どうか応援してやって下さい。初めて出した本がたくさん売れてくれると励みになります。それで儲けた印税は、世のため人のために手弁当で頑張っている徳島文学協会に寄付させて頂きます。決して私腹を肥やしたりは致しません。ですからぜひ百部くらいマウスをポチッとやって頂けると嬉しいです。ただし、公序良俗に反するイカれたエログロ小説で御座いまして、眉

を擧められるであろうことは寸毫の疑いもありませんが、それはこんなものを世に出した幻冬舎の方々の責任ですので、クレームは全てそちらへお願いいたします。ちなみに自分では電子書籍購入のやり方がいまひとつよくわかりません。専用のアプリをどうのこうのというのでめんどくさくなりまりました。いらちなのでインターネットは苦手なので。やっぱり本は紙のものですね。ではどうぞよろしくお願い申し上げます。

速報

阿部あみさん

小説「裏庭」

林芙美子文学賞佳作

徳島文学協会理事の阿部あみさんが第五回林芙美子文学賞の佳作を受賞されました。

受賞作は「小説トリック パー」春季号（三月十八日発売）に掲載予定です。

阿波しらすぎ文学賞

主催 徳島新聞社・徳島文学協会

徳島といえば阿波踊り、人形浄瑠璃など古来より文化芸能が盛んな場所として知られ、最近ではアニメを通してユニークな町おこしが話題になっていきます。現代文学においても瀬戸内寂聴、北條民雄という偉大な小説家を輩出しており、改めて徳島には様々な文化が生まれる素地があることがわかります。

しかし一方で、全国の地方都市同様、文化の都市部集中化や少子化のあおりを大きく受け、活力に満ちているとは言い難いのも事実です。そのような中、文化的な面から地域創生の一つのきっかけを作ることができればという願いを込めて、徳島文学協会と徳島新聞社が力を合わせて「阿波しらすぎ文学賞」を設立しました。

第一回の昨年は小学生からシルバー世代の方まで全国から四二二編が寄せられました。どれ

も切実な思いに満ちたかけがえない作品でした。最終的に受賞作は大滝瓶太さんの「青は藍より藍より青」、「徳島新聞賞」は坂東広文さんの「海風の吹く町で」、「徳島文学協会賞」は宮月中さん「お見送りの川」の三作品となりました。

「阿波しらすぎ文学賞」に応募いただいた皆様の作品を通して、徳島という場所の持つ多様な面があぶりだされることで、徳島を再認識、再発見していただく機会になればと思います。また執筆活動を通して、多くの方に生きがいや心の豊かさを実感してもらい、真の地域活性化が促されれば、それに勝る喜びはありません。

多くの皆さんから参加いただくため、全国公募としました。ただし徳島の地域や文化、歴史、産業などを作中に登場させてください。単に徳島を賛美するのではなく、徳島のどんな側面をどのように切り取り一編の文学作品として成立させるのか、皆さんの大胆なアプローチを期待しています。

徳島文学協会会長

佐々木義登

徳島新聞阿波しらすぎ文学賞 作品募集

◆募集対象

日本語で書かれた広義の小説作品

※インターネットも含め未発表作品に限る。

※徳島ゆかりの地域や文化、歴史、産業、人物などを作中に登場させること。

◆募集資格

広く全国から募集

※年齢、性別、職業、国籍は問わない。

◆原稿枚数

四百字詰の原稿用紙に十五枚以内

◆原稿書式

縦書きを原則とする

※パソコン・ワープロ原稿の場合

合は四百字詰原稿用紙での換算枚数を明記する。一枚あたり

縦書き四十字×三十行で作成し、A4判の用紙横向きでプリントすること。

※四百字詰の原稿用紙に書ききても可能。

※作品の冒頭には題名を明記（作者名は入れない）すること。

※作品にはページ番号をつけて右肩をホッチキスでしっかりと

綴じること。

※応募は一人一篇。

※作品とは別に、以下のことを明記した表紙をつけること。

●タイトル ●住所（徳島出身で

県外在住の方はその旨記載） ●

氏名・ふりがな（ペンネームの場合

は本名も） ●年齢 ●職業 ●電話番

号（あれば携帯電話も） ●四百字詰原稿用紙の換算枚数（※パソコン・ワー

プロ原稿の場合）

※あらずしは必要なし。

◆募集締切

二〇一九年六月十日消印有効

※応募作品の変更、訂正、差し替え、返却等は不可。

◆賞金

阿波しらすぎ文学賞 三十万円

徳島新聞賞 十万円

徳島文学協会賞 三万円

※徳島新聞賞は徳島出身及び徳島在住者から、徳島文学協会賞は二十五歳以下の応募者から選ばれる。

※徳島新聞賞は徳島出身及び徳島在住者から、徳島文学協会賞は二十五歳以下の応募者から選ばれる。

※徳島新聞賞は徳島出身及び徳島在住者から、徳島文学協会賞は二十五歳以下の応募者から選ばれる。

◆最終選考委員長

芥川賞作家 吉村萬香氏

◆発表

二〇一九年八月

受賞作は徳島新聞紙上および徳島新聞ホームページに掲載

※選考経過に関する質問には回答できない。

※受賞作は発表後、文芸誌「徳島文学」に掲載する。

※受賞者は徳島新聞のインタビュー取材に協力していただき、写真やプロフィールも掲載する。

※九月に表彰式とトークイベントを開催する。

※入賞作品の複製権（出版権を含む）、映像化権などの利用権（二次利用を含む）は徳島新聞社に帰属する。入賞作品の出版や二次利用を行う場合は、徳島新聞社との事前協議を必要とする。

◆応募作の宛先

徳島新聞社事業局事業部

「阿波しらすぎ文学賞」係

〒七七〇-八五七二

徳島県徳島市中徳島町

二丁目五番地二

◆問い合わせ先

徳島文学協会事務局

電話〇八〇-六二八四-〇二九六

（日曜祝日を除く九時～十七時）

メール society@t-bungaku.com

※原稿の書き方や作品の内容に関する質問は受け付けません。

北迫薫さんの『夜間飛行』発売

文学協会会員の北迫さんの初めての長編小説が、新潮社より発売されました。楽天、アマゾン、紀伊国屋書店などネット通販でご購入いただけます。



徳島に惹かれて

三木 蘭美

『徳島文学』の創刊を知ったのは、確か若松英輔さんのツイッター上でだったか。偶然の必然、という出会いが時折ある。

両親が香川県出身者なので、東京暮らしも長くなつてはいるが、我が家のお雑煮はシンプルな白味噌仕立てである。母方の祖父母は従兄妹同士で徳島出身、次男坊の祖父は県境を超えて香川で所帯を持った。

以前母から、祖先が藍染をしていたという話を聞いていた覚えがあり、古本屋で見つけた「阿波藍民族史」に店の屋号でも出ているかと思いきや、そんな大きな店ではなく、土間で家庭用の染織をしていたぐらいいのことらしく、拍子抜けした。だが、土間に甕のある生活は、現代の私にとっては憧れである。

徳島新聞で阿波しらすぎ文学賞、原稿用紙十五枚の掌編小説の募集があり、十五という枚数には何とかなるかも、との期待もあったが、若松氏の文章や原民喜の短編童話集を写し書きし、文字を綴る練習はしてみても、さて自分のオリジナールとなると、結局筆が進まなかった。

その内に締め切りも来てしまったが、その後思いがけなくブックギャラ

リーにて一冊の詩集との幸福な出会いがあり、それは宮尾節子さんの『ドストエフスキーの青空』だったが、それがきっかけになり、やがて九月からは松下育男さんの詩の教室に参加することに発展した。思い返せば全くの素人でもなく、俳句をやっていた時期もあったのだが、夏以降思いの外、詩が生まれている。それだけに溜めていたものもあつたのだろう。

いつか、かつて見た鳴門の渦潮の、季節はずれで渦を巻いていない、ただ不穏になぎなぎちやぶちやぶぶつかり揺れていた波のことを書いてみたい。詩で書けるだろうか。その時期を待っている。徳島文学協会会員になり、投稿できる場を持って、感謝しています。

私はたいしたことのない人間

サトウ ユウト

「私はたいしたことがない」というと、ふつうは自分を呪う言葉になります。ただこのところ、私と同時に「他人もたいしたことがない」といえるのかも、しれない、と思うようになりました。大都会東京が地方出身者のるつぽであるように、世の中は「たいしたことのない私」の集まりなのではないか、と。なぜこう考えるに至ったかというところ、この分野については一家言ある

「造詣が深い」などと飾り立て、偉ぶったところで、どんなに小さな分野でも完璧に理解し尽くすことはできないからです。文字ひとつ書くにしても満点は取れないですし、書くための鉛筆一本、こしらえることもできません。あなたも私も、その程度なのです。誰もが人間の世界の、さらに限られた範囲で背の順に並んでいるに過ぎず、ソウヤキリンからすれば誤差みたいなもの。だとすれば、自分と他人の力量を過大に評価して、勝手に絶望するなんてもつたいないと思いませんか。誰もが何かはできても何かができない、いびつな存在です。そのいびつさを均して見れば、結局のところ、みんながみんな、たいしたことがない。なにもかもを求めたり、足りないことを嘆くのではなく、そのいびつさを取り出して愛おしむことが、これからの人間の生き方なのかもしれません。なんでも、完璧は機械がやってくれるそうですから。ますますたいしたことのない人間でいていいのだと思います。とりあえず、機械基準では。

「とと」掲載エッセイを募集します

文学に関することなどを題材にした八百字以内の原稿を、ワード形式で事務局へお送りください。(送信時には件名に『とと掲載用』と入れてください)

「とと」は春、夏、秋の年三回発行ですが、一回につき掲載できるエッセイは二〜四作品です。先着順で掲載できない場合は次号に回します。

文芸批評会のご案内

複数の文学賞受賞者を含む十名以上の徳島文学協会主要メンバーを集め、皆さんの作品を粗上に載せて批評会をさせていただきます。事前で作品を読ませていただき、当日メンバー一人一人から、熱のこもったアドバイスを受けることができます。直接、質疑応答にもお応えいたします。

参加の流れ

- 一、メールにて『批評会参加希望』と明記してお申し込みください。お申し込みは会員の方に限ります。
- 会員番号 ●名前 ●希望日(末尾記載の開催日よりお選びください)
- 二、参加日が決まりましたら、指定の振込用紙を送付しますので、参加料をお支払いください。年二回まで参加できます。
- 三、批評会に提出したい作品を、開催月前月の二十日までに、事務局へメール添付(郵送不可)でお送りください。
- 四百字詰原稿用紙換算で三十〜百五十枚まで
- ワード形式縦書き(四十文字×三十行推奨)冒頭にタイトル、名前、原稿用紙換算枚数をご記入ください。原稿には、かならずページ番号をお付けください。

●開催日 二〇一九年五月四日(土・祝)

二〇一九年六月八日(土)
二〇一九年七月六日(土)

●場 所 徳島県立文学書道館
●場 所 徳島県立文学書道館

●参加費 会員のみ対象 三万円(年二回まで)

●締 切 毎月二十日まで ※先着順

●主な参加者 佐々木義登、菊野啓、久保訓子、藤代淑子、阿部あみ、高田友季
子ほか十名程度(参加メンバーは変更する場合があります)

●お申し込み先メールアドレス
society@bungaku.com

文学イベント案内

「みんなで楽しむ俳句鑑賞講座」

当日お渡しするプリントの中からみなさんの好きな句を選んで頂き、得点の高い俳句からみなさんと一緒に鑑賞していきます。
自作の俳句は要りません。鑑賞を通して俳句の魅力に気づくことができる講座です。

■開催日 二〇一九年四月七日(日)
十四時～十五時半

■場所 徳島県立文学書道館

■講師 俳人・原英(はらえい)

■参加費 会員一〇〇〇円、非会員一五〇〇円、
学生五〇〇円

■定員 十五人

「短編小説研究所」《エキスパート対象》

純文学作品を執筆されている方で、指定された本を最後まで読んで、創作に役立てたいと意欲を持っている方を対象にした講座です。プロの作品をテーマに短編小説を議論中心で皆さんと考えます。

■開催日 二〇一九年四月二十日(土)
十九時～二十時半

■場所 徳島県立文学書道館

■講師 佐々木義登

■参加費 会員一五〇〇円、非会員二五〇〇円、
学生五〇〇円

■定員 十五人

■作品 彩瀬まる「けだものたち」
(単行本『くちなし』《文藝春秋》より)

「心豊かに生きるための哲学講座」

哲学を学ぶと世界の見え方が変わります。日々の暮らしを一度客観的に見つめるためにも、様々な角度から物事を考えてみましょう。誰もが理解できる言葉で素朴な問題を皆さんとディスカッションしたいと思えます。

今回は話題のマルクス・ガブリエルの存在論について皆さんと考えます。
近代以降の哲学の流れを確認しながら、今私たちが直面しているポストモダン以降について議論したいと思えます。

■開催日 二〇一九年五月十八日(土)
十九時～二十時半

■場所 徳島県立文学書道館

■講師 佐々木義登

■参加費 会員一五〇〇円、非会員二五〇〇円、
学生五〇〇円

■定員 十五人

「小説広場」～みんなで合評会～

あなたの書いた小説を合評会に出してみませんか。作者であるあなたにも、見えなかったものが見えてくるはず。作品を提出してくださる方、作品はなくても合評会に参加してくださる方を募集しています。

■開催日 ①二〇一九年五月二十二日(水)
②二〇一九年七月二十四日(水)
毎回 十時～十二時

■場所 徳島県立文学書道館

■アドバイザー 藤代淑子、久保訓子、阿部あみ

■参加費 会員一〇〇〇円、非会員一五〇〇円、
学生五〇〇円

■定員 十五人

※合評作品は、随時受付しています。
詳しくは事務局までお問い合わせください。

「エッセイ入門講座」

楽しみながらエッセイを執筆してみましょう。講座では実際に文章表現にチャレンジしていただき、その場で講師がレクチャーします。

■開催日 二〇一九年六月十五日(土)
十九時～二十時半

■場所 徳島県立文学書道館

■講師 佐々木義登
■参加費 会員一五〇〇円、非会員二五〇〇円、
学生五〇〇円
■定員 十五人

「パソコン倶楽部」

～みんなで文芸冊子をつくらう～

パソコンで文芸作品を創作するための知識や技術を講習します。ワードでの基本的な文字入力や編集方法等をお伝えします。個々の質疑応答を中心に進めますので、ご質問等がございましたら、お申込の際にお伝えください。

■開催日 二〇一九年六月二十九日(土)
十四時～十六時

■場所 徳島県立文学書道館

■講師 パソコン倶楽部部長 魚井美佐

■参加費 会員一〇〇〇円、非会員一五〇〇円、
学生五〇〇円

■定員 十五人

※ご自身でお使いのノートパソコンをご持参ください。
ご用意できない場合はお申込の際にご相談ください。

「私のイチオシ小説」《会員限定》

お気に入りの小説を持ち寄り、皆さんで一人一作品、持ち時間五分の間にプレゼンします。ジャッジ役専門でという方もぜひご参加ください。
参加者全員で投票し「イチオシ小説」を決定します。

「イチオシ小説」に選ばれた方は、徳島文学協会ホームページに本の紹介文(原稿用紙二枚程度)を作成していただきます。協会より原稿執筆料として五千円分の図書カードを進呈します。

■開催日 二〇一九年七月二十日(土)
十九時～二十時半

■場所 徳島県立文学書道館

■参加費 会員一〇〇〇円、学生五〇〇円

■定員 十五人

※こちらは会員限定のイベントです。

ご入会や講座のお申し込み・お問い合わせは徳島文学協会事務局まで

〒771-3201 徳島県名西郡神山町阿野字方子 103 TEL:080-6284-0296

society@t-bungaku.com https://www.t-bungaku.com/